

# 蜀布と邛竹杖

工藤元男

## はじめに

前漢の武帝が北方の遊牧騎馬民族匈奴と戦うため、西方の月氏との同盟を計画して張騫を西域に派遣した挿話は人口に膾炙している。そして彼が帰国の途中に立ち寄った大夏（アフガニスタン北部）で「蜀布・邛竹杖」を目撃し、それらは大夏の商人が身毒（インド）で買入れたものであることを知り、これより蜀から身毒を通過して大夏に至る交易ルートが存在を推定し、これが「西南シルクロード」開拓の契機になったこともよく知られたその一齣である。この西南シルクロードに関して、日本ではあまり議論されないが、中国では近年比較的活発な議論が展開されている。しかしその原点とも言うべき蜀布と邛竹杖については解釈が多岐に分かれている。そこで小論ではこれまでの議論を再検討し、蜀布と邛竹杖の実体、ならびにそれに関連する蚕種の西伝伝承について考察したいと思う。

当該問題に関する基本史料の一つの「史記」卷一一六・西南夷列伝に、次のようにある。

及元狩元年、博望侯張騫使大夏來、言「居大夏時見蜀布・邛竹杖、使問所從來。曰、（從東南身毒國、可數千里、得蜀賈人市）。或聞（邛西可二千里有身毒國）。騫因盛言、「大夏在漢西南、慕中國、患匈奴隔其道。誠通蜀、身毒國道便近、有利無害」。於是天子乃令王然乎・柏始昌・呂越人等、使間出西夷西、指求身毒國。至滇。滇王嘗羌乃留、爲求道西十餘輩。歲餘、皆閉昆明、莫能通身毒國。滇王與漢使者言曰、「漢孰與我大」。及夜郎侯亦然。以道不通故、各自以爲一州主。不知漢廣大。使者還、因盛言、「滇大國、足事親附」。天子注意焉。

文中の邛竹杖について「史記集解」は、

韋昭曰、「邛縣之竹、屬蜀」。瓚曰、「邛、山名。此竹節高實中、

可作杖」。

とする三国呉の韋昭と晉の臣瓚の両説を挙げている。すなわち韋昭は耶竹杖を蜀郡の耶県に産する竹とし、これに対して臣瓚は耶を山名とし、その山に産する竹は節が高く中が詰まっており、杖を作るのに適している、としている。そこでまず韋昭注を検証するため『漢書』卷二八・地理志下の蜀郡条をみると、そこに臨耶県はみえるが耶県はみえない。張騫が耶竹杖・蜀布に言及しているもう一つの史料は、『史記』卷一三三・大宛列伝の次の文である。

臣在大夏時、見耶竹杖・蜀布。

【史記正義】はこの文に対して、

耶都耶山出此竹、因名耶竹。節高實中、或寄生、可爲杖。布、土蘆布。

と注し、耶竹杖の産地を「耶都の耶山」としている。耶都とは西南夷の耶都夷の地に置かれた県で、前漢では越嵩郡に属し、現在の西昌市および凉山地区に相当する。<sup>(1)</sup>この「耶都の耶山」について、『史記』大宛列伝を転載する『漢書』卷六一・張騫伝の「臣在大夏時、見耶竹杖・蜀布」の文に対して、王先謙の『漢書補注』は、

耶山即地志嚴道下之耶來山。『元和志』耶來山在今榮經縣西五十里、山出竹、高節實中、堪爲杖、名耶竹、因山以爲名也。

と注している。すなわち王先謙は、耶山は『漢書』卷二八・地理志の蜀郡嚴道の原注に、

耶來山、耶水所出、東入青衣。

とある耶來山のことであると指摘した上で、『元和郡縣圖志』卷三二・劍南道中・榮經縣の条に、

耶來山、在縣西五十里。本名耶笮山、故笮人之界也。山巖峭峻、出竹高節實中、堪爲杖、因名山也。

とある文をその論拠としている。しかしこの解釈は耶竹杖が耶來(嶽)山の名に由来することを主張するだけで、張守節が「耶都の耶山」と注している「耶都」との関係については論及しておらず、徹底を免れないが、この解釈は顧祖禹の『讀史方輿紀要』にも継承されている。<sup>(2)</sup>このように『元和郡縣圖志』と『讀史方輿紀要』は耶竹杖の産地を耶嶽山としているが、その耶嶽山には広狭両義がある。広義では横断山脈の最東の支脈として岷江と大渡河の間を南北に走る山地を総称し、海拔六二五〇以上の四姑娘山がその主峰である。狭義では都江堰市と天全県以西、大渡河以東の高山の総称である(八四頁の地図参照)。<sup>(3)</sup>耶嶽山は成都平原と川西高原の自然境界をなす山脈として知られている。その東麓に位置する現在の耶嶽県は秦代の臨耶県に起源し、秦漢時代には蜀郡に属した。したがって韋昭が「耶縣の竹なり、蜀に屬す」と注する「耶県」とは臨耶県を指すとみてよい。以上の検討から、耶竹杖はその産地に由来する名称で、その産地として耶都県・耶嶽山・臨耶県の三者が挙げられていることになる。

一方、この耶竹杖にまつわる伝説が四川南方の雲南にあり、李昆声氏によると次の如くである。<sup>(4)</sup>

宋代の大理国で鄯闍（昆明）侯高光と弟の高智の兄弟が、昆明の西郊にある玉案山で狩し、犀を追いかけていたとき、忽然として仙僧が現れ、杖にしていた箬竹杖を地に落とすと、それに根が生え、翌日そこは一面に密生した箬竹に化していた。そこで高氏兄弟はその地に寺院を建立し、箬竹寺と命名したという。箬竹寺がじつさいに建立されたのはこの伝説より後、すなわち元代初期の雄弁法師によるもので、中原の禪宗がこの地に伝来したときの最初の寺とされている。ともあれこの伝説によれば、耶竹杖は後代の雲南地方でも繁殖していたことになる<sup>(6)</sup>。

このように、耶（箬）竹は史乘に知られた竹であるが、しかしその分布や自生の状態などについては近年までほとんど不明であった。本格的な学術的報告がなされるようになったのは、ようやく一九八〇年代になってからである<sup>(6)</sup>。李徳銖・薛紀如の両氏によると、箬竹属 *Qiongzhuca Hsueh et Yi* は近年新たに立てられた属で、この属は箬竹 *Qiongzhuca tumidinoda Hsueh et Yi* を模式種（モデル種）とし、その中にはさらに大葉箬竹・細稈箬竹・平竹・柔毛箬竹・光竹・実竹子・三月竹なども含まれる。それらは湖北・貴州・四川・雲南等の各省に分布し、海拔一五〇〇〜二二〇〇<sup>(7)</sup>の山岳地帯、常緑広葉樹の下に生育する。箬竹はさらに羅漢竹・宝塔竹・算盤竹などの別名を持つ。程の高さは六<sup>(8)</sup>に達し、直径は一〜三<sup>(9)</sup>、節と節の間は一〇〜二五<sup>(9)</sup>、基部の数節は中が詰まっている。程の周りはボタン二つが合わさったように激しく隆起している。この節の独特の形、

## 蜀布と耶竹杖

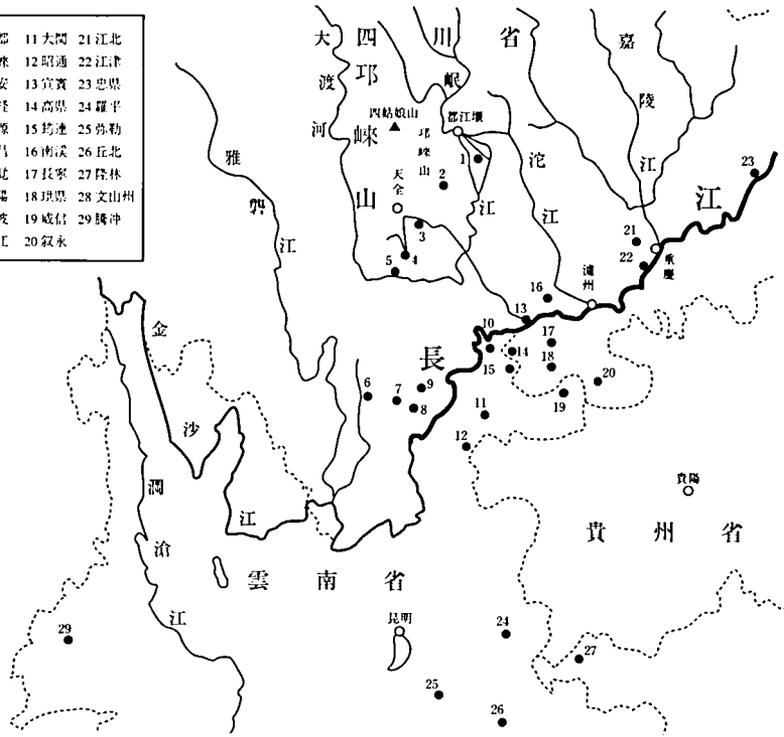
あるいは枝葉の繊細さから觀賞用の竹として親しまれ、杖や手工芸品を作る材料とされてきた<sup>(8)</sup>。また林鴻榮氏によると、先秦〜明清における耶竹の分布は、西南の榮経・西昌・昭覺・金陽・珙県・高県・筠連・南溪・叙永・江津・江北・忠県・綏江・大関・昭通・威信・弥勒・羅平・丘北、および広西の隆林、湖北の龜山、としている<sup>(9)</sup>。さらに藍勇氏はこの分布区域に加えて、歴史時期の成都・耶岷・漢源・雅安・宜賓・雷波・長寧・騰冲および雲南省文山州の諸県を挙げ、その主要分布を川西・川南・滇西・滇南そして滇東北の地区とし、それらの分布地には“南方絲綢之路”の主線支線が放射状に広がっており、耶竹杖はこのルートに沿って外へ輸出された、と推定している<sup>(10)</sup>。

これらの諸説に従って、耶竹の分布地を地図に落とすと次頁の図のようになる。みられるように、これらの分布地は先に耶竹杖の産地と指摘されてきた耶都県・耶岷山・臨耶県の範圍をはるかに超えるものである。そのため耶竹杖の名の由来は、さらに別の観点から考えなければならなくなる。

耶都県・耶岷山・臨耶県はともに「耶」を冠する地名で、それは西南夷の耶都夷と深くかわると考えられる。耶都夷の住地は前漢武帝に経略されて耶都県となり、その一帯には越嵩郡が開置された。郡治の耶都県は現在の西昌東南にあたる。また『統漢書』郡国志五・蜀郡属国の嚴道条で劉昭が注引する『華陽国志』に、

耶岷山、本名耶苻、故耶人・苻人界也。

1 成都	11 大邑	21 江北
2 邛崃	12 昭通	22 江津
3 雅安	13 富貴	23 忠縣
4 荊州	14 高縣	24 羅平
5 漢源	15 筠連	25 彝勸
6 西昌	16 南溪	26 丘北
7 昭化	17 長寧	27 陸林
8 金陽	18 琅嶼	28 文山州
9 雷波	19 威信	29 騰冲
10 叙永		



とあり、これによると邛崃山はもと邛苻と言ひ、邛都夷と苻(苻)都夷の自然境界であるとする。そこで桑秀雲氏は、邛都夷はその東、苻都夷はその西に分布していたと解している。<sup>(1)</sup>同条の劉昭注引の『華陽国志』にはさらに、

邛人自蜀入、度此山甚險難、南人毒之、故名邛嶺。

とあり、邛嶺山と邛都夷の関係が述べられている。これによれば邛都夷は蜀にも分布していたことになる。『華陽国志』卷三・蜀志・定苻県の条にも、

汶山曰夷、南中曰昆明、漢嘉越嶲曰嶺、蜀曰邛、皆夷種也。

とあつて、蜀の夷種を邛都夷としている。『華陽国志』卷三・蜀志・蜀郡・臨邛県の条にも、

郡西南二百里、本有邛民。秦始皇徙上郡實之。

とあり、臨邛県の地には元來邛都夷がいたけれども、秦の始皇帝のとき上郡の民をここに移住させた、としている。そのため桑秀雲氏は、秦代の邛都夷は蜀地の邛嶺山以東(現在の邛崃県一帯)におり、漢代になると越嶲郡を中心に分布していたと解している。<sup>(2)</sup>桑秀雲氏はこうした邛都夷の分布の拡大を氏人の遷徙の一環として捉えている。すなわち邛都夷・苻都夷・冉駹の分布地区は氏人の南遷のルート上にあり、その一部はこの遷徙の過程で土着して邛都夷などの部族となつたが、その後も遷徙はつづき、東は巴蜀から川東をへて黔などにおよび、さらに長江を東に下つて湖北・江西・安徽に至り、北は河南・山東に至つたとする。<sup>(3)</sup>ただし冉駹の構成種族には氏の他

に羌が含まれることは明らかなので、<sup>(14)</sup> 邛都夷・笮都夷・冉駹の母胎を一括して氏と論断する桑氏の見解は不正確なのであるが、しかし少なくとも邛都夷の分布地域が邛竹杖の分布地域と重なる点に注目する必要がある。これらのことから邛竹杖の「邛」の由来は邛都夷の分布地区および移動地区が邛竹杖の分布地区と重なっているために生まれた名称と解される。それならば邛都県・邛崃山・臨邛県も邛竹杖の分布地区と重なるので、結果的には必ずしも誤りではないことになろう。

## 二、蜀布をめぐる諸問題

では蜀布とは何であろうか。この蜀布の実態をめぐる藍勇氏は近年の諸説を次の三つに整理している。<sup>(15)</sup> ①哀牢附近の僚・濮の産する木棉の織物で、蜀の商人によって仕入れられたためそのように呼ばれたとする説、<sup>(16)</sup> ②高級な絹織物の一種とする説、<sup>(17)</sup> ③麻織物の細布の一種で、漢代の黄潤筒布とする説、<sup>(18)</sup> である。前引の「史記」大宛列伝を転載する「漢書」卷六一・張騫伝では、文中の「蜀布」に対して、顔師古注が

布、細布也。

とする服虔の説を引用している。つまり「蜀布」とは「蜀の細布」であるという解釈である。この蜀の細布について、饒宗頤氏は次のような史料を挙げている。第一に「説文」十三篇上・糸部の「縵」<sup>(19)</sup>

字について、

蜀細布也。

とある「縵」である。ただし「説文解字義証」卷四一・糸部に引くところの「一切経音義」八に見える「説文」では「蜀白細布也」に作っている。第二に「太平御覽」卷第八二〇・布帛部七に引く「説文」に、

……縵、蜀布也。

とある「縵」である。第三に「説文」十三篇上・糸部に、

縵、細布也。……

とあり、「縵」はまた麻に从う「𦉳」にも作る。以上の史料に基づいて饒宗頤氏は、縵は細布の通称、縵は蜀の細布の固有名で、張騫がみた蜀布が細布であるならばそれは縵のことであると、さらに漢代人は蜀布を黄潤と言ったとも指摘している。<sup>(19)</sup> 縵を蜀布の固有名とする饒宗頤氏の指摘は正しいが、しかしそれ故に「縵」のみを張騫のみた蜀布と即断するのは如何なものであろうか。氏の挙げたこれらの史料から、むしろ我々は次のように概括できるように思われる。「縵」は細布の通称であり、そのような蜀の細布として「縵」・「縵」・「黄潤」などがあつた、と。ではこれらの蜀布は具体的にどのようなものだったのか。

前漢末の揚雄はその「蜀都賦」という有名な作品の中で、成都の手工業の精巧殷富さを次のように描写している。

其布則細(都)〔綺〕・弱折、錦繭成衽、阿麗織靡、避晏與陰。

蜘蛛作絲、不可見風。箒中黃潤、一端數金。<sup>(20)</sup>

これを張震澤氏の注釈を踏まえて訳すと次のようになる。

成都で織られている織物、すなわち細絺(細い葛布)、弱折(布名。材質は不明)、錦繭(生糸)で織られた襪(絹布)は、みな柔軟細緻で、その細緻さは暗中ではほとんど見えないほどで、蜘蛛の糸で織られたようなその薄さは風にも耐えないほどである。「箒(筒)中」(竹筒)に入った黄潤は一端で数金もする。

「端」とは布帛の長さの単位で、実寸をめぐって諸説あり、それは日本に入って「反」と書かれるようになる。<sup>(21)</sup>ここに列挙された細絺・弱折・襪はみなその柔軟さ・細緻さ・薄さが強調され、これに対して黄潤はその高価さが強調されている。このような描写は晉の左思「蜀都賦」にも継承され、ここでは次のように詠われている。

機杼相和、貝錦斐成、濯色江波、黄潤比筒、竊金所過。

ここで左思は、蜀の織物として岷江の分流の錦江でさらされた貝錦(蜀錦のこと)、および黄潤について紹介している。そして貝錦に対しては華麗な色彩を、黄潤に対しては高価さを強調している。つまり成都特産の織物を述べたこの二つの「蜀都賦」では、細絺(葛の細布)・弱折(材質不明の細布)・襪(生糸の細布)に対して柔軟細緻さを強調し、貝錦(蜀錦)に対して華麗な色彩を強調し、黄潤に対しては高価さを強調しているのである。そしてとくに高価さが強調されている黄潤については、上引の左思「蜀都賦」の劉逵の注に、

黄潤、謂筒中細布也。司馬相如「凡將篇」曰、「黄潤織美宜細

襪」。

とあり、黄潤は筒中(竹筒)の中に入っている細布であるとし、それが織美(薄くて美しい)で「襪」(或作襪)を作るのに良いとする司馬相如の「凡將篇」(佚文)を引用している。

たしかに黄潤が筒中に収められた商品であることについては、や後代の「晉書」卷四三・王戎列伝でも確認される。

戎渡江、綏慰新附、宣揚威惠。……(略)……南郡太守劉肇賂戎筒中細布五十端、爲司隸所糾。以知而未納。

これは西晉の咸寧五年(二七九)に呉に対する総攻撃が行われ、翌年三月に呉が平定されたとき、呉地に入って戦後処理に従事していた王戎が、占領下の南郡太守劉肇から「筒中細布五十端」を贈与され、司隸によって告発されたことを記したものである。前引の揚雄「蜀都賦」に筒中黄潤は一端で数金もするとあったが、王戎の場合はそれを五十端も受け取ったまま報告を怠った嫌疑に関連してであった。

さらに「南史」卷五二・梁宗室列伝下・附鄱陽忠烈王恢伝にもよく似た内容がみえる。

天監元年、封鄱陽郡王。除鄂州刺史、加都督。初、鄆城疾疫死者甚多、及藏殯。恢下車遽命埋瘞、又遣四使巡行州部、境大寧。時有進筒中布者、恢以奇貨異服、即命焚之。於是百姓仰德。

これによると、南朝梁の王恢が鄆州刺史となって鄆城に赴任したとき、(齊梁交替の混乱によってか)鄆城では流行病で死んだ者があま

りに多いため、人々は殯を蔵した。「蔵殯」とは死者が多くて本葬するのが間に合わず、埋葬されないまま棺がひそかに放置されていた状態であろう。そこで王恢は埋葬を命じ、州部の治安安寧に努めた。この王恢に対して「筒中布」を進呈した者がいた。王恢はそれを「奇貨異服」の故に焼却させた。その行為で王恢の輿望はますます高まったという。「奇貨異服」の意味は必ずしもはっきりしないが、高価な贈答品を意味する表現と解される。これら二つの事例は、王朝交替のさい戦後処理に乗り込んできた占領者に対して、被占領者側が何らかの働きかけをするため、占領者側に高価な商品を贈答していたことを示している。そしてその贈答品としていずれも「筒中細布」が使われているのは、それが高価なものであることを示すと共に、魏晋南朝時代になると筒中細布が長江中流域でも作られていたことを示している。

そしてこのような筒中細布の生産地の広がりには、「南史」卷一・宋本紀上においても認められる。

廣州嘗獻入筒細布一端八丈、帝惡其精麗勞人、即付有司彈太守、以布還之、并制嶺南禁作此布。

これによると、南朝宋の武帝はその生前清廉寡欲で、廣州より貢獻された一端八丈の「筒〔中〕」字を脱するか？「細布」に対して、それがあまりに精麗なるが故にそれを作る人民の労力を思い、献上した太守を弾劾し、筒細布を返却させ、かつ嶺南におけるその制作を禁じたとある。これによって我々は、揚雄の表現が決して誇張では

なく、また南朝時代に筒中細布が廣州でも生産されていたことを知るのである。これらのことから、黄潤は竹筒に入れられ、それ故に筒中布・筒中細布・筒細布等と呼ばれたことが分かる。

任乃強氏は細布の中でもとりわけ高価だった「黄潤」を、苧麻の織物と指摘している。氏はその「華陽国志校注」に附された專論の中で、ほぼ次のように論じている。<sup>(22)</sup> 長江河谷の巴地の貢人は、かなり早い時期から苧麻の野生種 (Ramie) を纖維作物として栽培化していた。秦漢時代、臨邛の大奴隸主の紡績工房では大量に買い付けてそれで細布を織り、四方に販売し、身毒・大夏にまで及んだ。この苧麻布を「蜀布」と称するのは、それが蜀地で生産されたからである。「芸文類聚」卷八五・布帛部に引かれた「史記」張騫伝(ママ)では蜀布を「蜀苧布」に作っている。それは蜀布が苧麻布であり苧布とも称されたことを魏晋隋唐の人々が知っていたからに他ならない。「華陽国志」卷三・蜀志・蜀郡江原県の条に、

安漢・上下朱邑出好麻・黄潤細布、有羌筒盛。

とあり、成都西南の江原県の安漢郷や上下朱邑郷の特産として黄潤細布が挙げられている。それは細麻布のことで、もとは葛の纖維で作られたが、巴・蜀の人々は苧麻でこれを作った。その細いこと紗や縮緬のようで、一疋ずつ竹筒の中に収めた。羌筒とは羌中の竹管を言い、それはとりわけ細長く、笛のようで、それで作った楽器を羌笛という。一疋がその羌筒中に入るのは、細さを強調したのである。<sup>(23)</sup> つまり黄潤は苧麻布を羌笛を作るような細い竹筒の中に巻き

入れてその薄さ・細さを強調する織物で、張翥の言う「蜀布」とはこの「羌筒」に入った「黄潤」を指すとしているのである。しかしその一方で、同書卷一・巴志・総序で巴地の物産について述べた部分に、

土植五穀。牲具六畜。桑・蠶・麻・苧・魚・鹽・銅・鐵・丹・漆・茶・蜜・靈龜・巨犀・山雞・白雉・黄潤・鮮粉、皆納貢之。

とある黄潤に対しては、「黄潤」は、生絹（薄織りの絹―引用者注）のとくに細く薄いもの。その精美な製品は竹筒の中に巻き入れて商品とすることができた。「蜀都賦」に「黄潤比筒」とあるのがそれである<sup>(24)</sup>とも注している。このように任乃強氏は一方で黄潤を竹筒に収めた苧麻の細布とし、他方で竹筒に収められた絹の細布とし、二つの解釈を提示しながらその違いについては何も言及していない。

また長江河谷の巴地の道人が苧麻の野生種を栽培化したことが仮に歴史的事実だとしても、氏の挙げる史料には黄潤が苧麻の織物であることを明確に示すものはない。史料には①「苧中黄潤」、②「黄潤比筒」、③「黄潤緞美宜制禪」、④「黄潤細布」とあるだけで、①②は黄潤が竹筒に収められていること、③④は黄潤が細布であることを示しているに過ぎないのである。

これに対して、劉琳氏も『華陽国志』に詳細な注釈を施している。すなわち氏は如上の蜀郡江原県の条に、

〔麻〕大麻を指す。成都平原は古来から大麻を産し、現在でも温江・郫县・灌県の生産量は四川全省のほぼ八〇パーセントを占

める。大麻の纖維で布を織ることができ、雄株（牡麻）の纖維はとくに白い。現在では主に麻袋・麻繩の原料となっている。

〔黄潤細布〕漢・晋における蜀中の特産物の細麻布で、「蜀布」とも称され、全国的に有名で、遠く国外にまで販売された。張翥が大夏で身毒（今のインド）商人の仕入れた「蜀布」を見たというのが、それである。牡麻の纖維で織られ、細くて柔らかく、竹筒の中に巻くことができ、そのために「筒中布」とも称され、現在の夏布のようなものである。（以下、司馬相如の「凡將篇」と揚雄の「蜀都賦」を引くが、略す―引用者）また「説文」に「罽、蜀細布也」とあり、これも黄潤を指すのであろう。〔羌筒〕大きな竹筒で、岷江上流の羌中に産するので、その名がある<sup>(25)</sup>のであろう。

と注し、「好麻・黄潤細布」の麻は大麻のことで、黄潤は大麻の纖維で織られた細布で、細く柔らかだったので竹筒の中に巻くことができ、張翥の見た蜀布がこれであるとす。しかし劉氏は麻を大麻と指摘するのみで、それが苧麻ではないことの論拠を示しているわけではないので、その材料についてはまだ問題が残されている。そこで我々はとりあえず「黄潤は竹筒に入った細布である」という基本認識に基づき、「細布」についてさらに検討してみたい。

細布には単独に「細布」と表記される場合と、黄潤細布のように「○○細布」と熟して表記される場合との両種の表記がみられる。単独表記の場合は実態が分かりにくいので、とくに後者の場合に着目

すると、『華陽国志』巻四・南中志・永昌郡の条に、哀牢夷の物産として、

有蘭干細布。蘭干獠言紵也。織成文如綾錦

とある。<sup>(26)</sup>文中の「蘭(蘭)干」とは「紵(苧麻)」を意味する獠人の言葉とあるので、蘭干細布は苧麻細布であることが知られる。『新唐書』巻四三・地理志七上・嶺南道の条にも土貢として「白紵細布」がみえ、これも苧麻細布であろう。

また劉琳氏の指摘する「縑」については、すでに検討した如く許慎は「縑」を「蜀細布也」としている。しかし「一切経音義」に引かれた「説文」ではこれを「蜀白細布也」に作り、「白」の一字が多い。するとこの「蜀白細布也」は嶺南道の土貢の「白紵細布」と同種のものともなされ、「縑」も苧麻細布であった如くである。ただし苧麻は古くより巴地で栽培されていたが、蜀地の苧麻栽培は唐以後であり、四川ではむしろ大麻の方が重要な生産物だったとする藍勇<sup>(27)</sup>氏の説もあるので、蜀布の材料については、今後さらに農学史的な視点からの検討が必要となっている。

ただここで指摘しておきたいのは、『後漢書』巻八八・西域伝の大秦国の条に、

又有細布、或言水羊毳、野蠶繭所作也。

とあり、大秦国の特産物として野蚕の繭から採った糸で織られた細布の例がみえることである。この細布についてはさらに『三国志』

巻三〇・魏書・烏桓鮮卑東夷伝で裴松之注引の三国魏・魚豢「魏

略」にやや詳しい内容が記されている。

有織成細布。言用水羊毳、名曰海西布。此國六畜皆出水、或云非獨用羊毛也、亦用木皮或野繭絲作。……(中略)……又常利得中國絲、解以爲胡綾。

やや難解な文であるが、これらによれば大秦国には野蚕の繭あるいは野繭の糸から織られた細布の存在したことがわかる。護雅夫氏は、これら「一種の山まゆからとれる生糸に似た纖維は古くから地中海方面で織られ、とくに小アジアの西南に浮かぶコス島のそれは有名であった」と指摘している。<sup>(28)</sup>このいわゆる「コス布」は大プリニウス(Gaius Plinius Secundus)に「婦人の衣服を薄くして裸に近くする」と言わせた薄い織物で、<sup>(29)</sup>そのため中国から伝来された絹布もその多くは一度バラして糸に戻され、ふたたびコス布のような薄物に織り直されたという。上文の魚豢の「魏略」に「又た常に中國の絲を利り得て、解きて以つて胡綾を爲る」とあるのが、まさにそれを指す。ここで我々は、中国の絹が西方に伝来する以前に地中海世界にあったコス布を中国側の記録が「細布」と表記し、またそのコス布に倣って織り直した一種の絹織物も「細布」と表記している点に注目しなければならない。つまり中国では麻布に対してのみならず、細い糸で織られた薄絹に対しても細布と認識していたのであり、具体的には前引の揚雄の「蜀都賦」にみえる「錦繭(生糸)で織られた衽(絹布)」もこれに含まれるであろう。

ちなみに饒宗頤氏によれば、細布は十升以上の細薄布を指す。絲

を繭から取るとき、四、五本の絲を合わせて一筋にしたものを糸といい、二糸を合わせて一縷としたものを絲という。八〇縷を一升といい、漢代でもっとも細密な細布は三〇升にも達するとされる。<sup>(30)</sup>

つまりこういうことではなかったか。細布とはそれが麻布にせよ絹布にせよ細密に織られた織物一般を指し、麻布の場合は絹と通称され、蜀の細布としては總・緝・黄潤などがあつた。また絹の細布もあつたが、蜀錦に代表される成都の絹織物業は前漢ではまだ襄邑の錦ほど有名ではなく、その名が広く知られるようになるのは漢末三国以後である。<sup>(31)</sup>したがって張騫のみた蜀布とは苧麻・大麻の別はともかく麻布の一種だったと解されるのである。

### 三、東ローマの養蚕伝承と蜀布・邛竹杖の関係

蜀布と邛竹杖の問題がこのように考えられるとすれば、それは東ローマの養蚕伝承の伝説と関連してくるであろう。

当時、内陸アジアのシルクロードをへて東ローマに中国産の絹が入ってくる場合には、ササン朝ペルシャ領内を通過した。そのため東ローマではササン朝と協定を結び、国境に交易場を設け、そこへ担当官吏が出向いて、ペルシャ商人から独占的に絹を買い入れる方法をとっていた。しかし国境線をめぐるササン朝との慢性的な戦争状態がつづく、その紛争のあおりをうけて絹の供給が激減する

ようになった。この危機的状況を打開するため、東ローマでは養蚕の技術を取り入れ、自前の絹の生産に着手することに成功した。この養蚕技術の伝承をめぐって、二つの伝承が記録されている。

一つは六世紀前半の東ローマの歴史家プロコピウス(Procopius)の伝えるものである。彼によれば、東ローマに絹の輸入が激減してから一〇年ほどたった後、次のような事件があつたという。そのころインドから来たある修道僧たちは、ユステイニアヌス帝がもはやペルシャから絹を購入すべきではないと考えていることを知り、皇帝の前に参内し、問題の解決について次のように具申した。「自分たちはインドの多数の国がある中の北に位置する国——この国はセリンダ(Serinda)と呼ばれる——で長い間暮らし、そこでローマの地において絹がどのような手段であれば生産可能かを正確に学んだ」と。そこで皇帝は真剣に質問し、またその国が真実のものかどうかを理解するため、彼らに多くの質問をした。修道僧たちは皇帝に、ある虫は絹の製造主であり、自然がその教師となって虫たちが一生懸命に働くよう強いていること、またその虫を生きたままビザンティンまで運ぶのは不可能であるが、その卵を運ぶのは可能で、また概して簡単であるとも説明した(以下、蚕種に関する奇妙な記述があるが、省略)。……彼らがこのように語った後、皇帝は彼らに多大な恩賞を与えることを約束し、この話を実際に確かめてくるように求めた。そこで彼らはふたたびセリンダに行き、卵をビザンティンに持ち帰り、それらを虫に孵化する方法を記録し、その虫を桑の葉で飼った。

かくて彼らはそのときからローマの地で絹の生産を可能にした。<sup>(32)</sup>

護雅夫氏はこの伝説の原型が西域南道のコータン（于闐）にあつたと指摘している。<sup>(33)</sup> すなわち玄奘の「大唐西域記」卷一二・瞿薩旦那國附蚕桑伝入之始の条に、次のような伝承が著録されている。

昔者此國未知桑蠶、聞東國有之、命使以求。時東國君秘而不賜、嚴勅關防、無令桑蠶種出也。瞿薩旦那王乃卑辭下禮、求婚東國。

國君有懷遠之志、遂允其請。瞿薩旦那王命使迎婦、而誡曰、「爾致辭東國君女、我國素無絲綿桑蠶之種、可以持來、自爲裳服」。女聞其言、密求其種、以桑蠶之子置帽絮中、既至關防。主者逼索、唯王女帽不敢以檢。遂入瞿薩旦那國、止鹿射伽藍故地。方備儀禮、奉迎入宮、以桑蠶種留於此地。

その要旨は次の如くである。その昔、この国（于闐）では養蚕が知られていなかった。そこで東国（中国）へ使者を派遣して求めさせたが、東国では関所を固めて養種の持ち出しを阻止した。そこでコータン王は一計を案じ、東国の王に王女の降嫁を請い、養種を持ち出して自ら衣裳を製するよう王女に伝言した。王女は帽絮の中に養種を隠し、関所を無事通過し、以後コータンでは養蚕が行われるようになった。そしてこれを絵画で表現したほぼ同時代の板絵が、イギリスのA・スタインによってコータン東北のダンダン・ウィリクの寺院址で発見されている。

もう一つの伝承は、プロコピウスより少し後の、六世紀末の東ローマの歴史家テオフィアネス（Theophanes）の伝えるものである。それに

よれば、以下の如くである。

ユスティニアヌスが皇帝であったときに、あるペルシャ人が蚕の増殖のしくみ（ars secretum）をビュザンティオン（コンスタンティノポリスのこと―引用者）に伝えた。これはそれ以前のローマ人（現代で言うビザンツ人のこと―引用者）には知られていなかった。このペルシャ人は、セーロス人の国からやってきて、蚕（毛虫）の種（卵）を杖の中に入れて、ビュザンティオンまで守ってきた<sup>(34)</sup>……。

コータンにおける伝承と東ローマにおける二つの伝承の關係について、護雅夫氏は次のように推測している。

仏教国于闐（コータン―引用者）の説話が流砂をわたりパミールの險をこえて、絹商人の口からササン朝ペルシャをへて東ローマへ伝えられ、そのあいだに、いつしか、「東国の王女」が「僧侶」または「ペルシャ人」に、「冠」（帽絮）が「杖」に、そして「于闐王」が「東ローマ皇帝」にかわっていったと考えるのは無理だろうか。<sup>(35)</sup>

我々はこのコータン版の伝承において、東国の王女の「帽絮」の中に隠されて運ばれた養種が、テオフィアネスの伝える伝承では「蚕（毛虫）の種（卵）を杖の中に入れて」持ち出したとなっている点に注目する必要がある。いったいこのユニークなモチーフはどこから導入されたものなのか。大夏はコータンの西ほぼ一二〇〇<sup>キ</sup>余りのところにあるので、蜀から身毒をへて大夏に運ばれた蜀布と邛竹杖は、

その途中の西域南道上に位置するコータンのバザールでも売られていたと思われる。しかし蜀布はともかく、さして商品価値のあるとも思えぬ竹の杖が、なぜはるか大夏まで運ばれたのであろうか。

すでに検討されているように、蜀布は細布で、その細布には種々の種類があり、もつとも高価な細布が黄潤だった。そして「華陽国志」蜀志・江原県の条には、黄潤細布が「羌筒」に収められるとあり、劉琳氏はこの「羌筒」に「大きな竹筒で、岷江上流の羌中に産する」と注している<sup>(36)</sup>。しかし任乃強氏の言うように、黄潤はその細さを強調するため筒中に収めるのであるから、羌筒は「大きな竹筒」であるはずがない。しかも黄潤は「筒中細布」とも称されているので、必ずしもその竹筒が「羌筒」に限定されたわけでもあるまい。おそらく西南シルクロードを通じて運ばれた蜀布は、とくに耶竹杖の中に収められたものではあるまいか。耶竹の直径が一〜三寸といつものも、細布の薄さを強調するには適当な太さと思われる。

つまりテオフアネスの伝える伝承は、黄潤細布に代表される蜀の細布がその薄さを強調するため耶竹杖に収められて西方に運ばれたという歴史的事実を反映したものと考えられる。より正確に言えば、蜀から西南シルクロードを通じて西方に運ばれた細布は、当初黄潤を代表とする麻織りの細布であったが、やや時代が下つて蜀でも絹織物業が盛んになると、絹の細布もやはり耶竹杖に収められて運ばれたのであろう。するとやはり張騫がみたのは麻の細布だったことになる。したがって、コータンの伝承、すなわち東国の王女が帽絮

の中に養種を隠して持ち出したという伝承よりも、テオフアネスの伝える伝承、すなわちあるベルシャヤ人が蚕種を杖の中に入れて持ち出したとする伝承の方が、蜀布と耶竹杖の関係をより直截に反映した伝承であり、コータンの伝承はこれよりいくつかの段階の変容を経て形成された伝承ということになる。

## むすび

蜀布と耶竹杖についてはあまりに有名なので、小論で取り上げた論考以外にも数多く存在する。しかしその大半は論証を欠いて自説を展開するものである。そこで小論では史料に即して論証している数篇の論考をよく対象として再検討した。結論的には細布を黄潤と考える論者は少なくはない。しかし蜀の細布と東ローマの蚕種西伝伝承と結びつけたものは、管見の限りないようである。関連史料が少ないので、小論も十分実証されたものとは言い難いが、将来耶竹杖の中に収められた蜀布が考古学的に発見されることを切に期待している。

ところで、先に筆者は「張騫が大夏で見た蜀布と耶竹杖について」という小文を書いている<sup>(38)</sup>。それはほんのメモ程度の覚書に過ぎなかったもので、いずれ論文の形にするつもりであった。今夏(二〇〇一年)、早稲田大学長江流域文化研究所の海外調査の一環として、耶竹の分布地の一つである四川省雷波県を訪問する機会があり、耶竹

杖や耶竹の筈を売っている店など現地状況をつぶさに調査することができた。小論ではこうした現地調査を踏まえ、旧稿に対して大幅な補訂を加え、書き直した。

〈付記〉

(一) 本稿は二〇〇一年八月五日、八月二六日にかけて行われた四川大学哲学芸術学院との日共同調査による成果の一部であり、また本学特定課題研究「民族走廊」からみた羌・氐の遷徙と巴蜀文化」の研究成果の一部でもある。

(二) 東ローマ側の史料については、本学文学研究科教授小林雅夫氏、エルフルト大学東洋史研究室助手の小田謙爾氏に多大なご助力を賜った。末尾ながら厚く感謝を申し上げる次第である。

注

- (1) 方国瑜『中国西南歴史地理考釈』(上冊、中華書局、一九八七年)一四頁。
- (2) 『説史方輿紀要』卷七二・四川七・雅州・榮經県・耶岷山の条に「縣東四十里。一名耶竹山、亦曰耶雙山。山峻阻、凝冰夏結、冬則劇寒。産竹、高節而中實、所謂耶竹杖也」とある。
- (3) 『四川省』編纂委員会編『四川省』(中華人民共和国地名詞典、商務印書館、一九九三)七八八頁。
- (4) 李昆声編著『雲南文物古迹』(雲南人民出版社、一九八四年)一一二頁
- (5) もっとも耶竹杖は竹ではなく、省藤(和名しらふじ)で作った杖とする解釈もある。任乃強氏によれば、その最多産地は南洋諸島とインドシナ半島で、それが西南夷の耶国から巴蜀へ輸出され、中原にまで達したとする

蜀布と耶竹杖

(任乃強「蜀布・耶竹杖入大夏考」、同氏校注『華陽国志校補図注』所収、上海古籍出版社、一九八七年)。

(6) 荻原樹徳「幻の植物を追って」(講談社、二〇〇〇年)一三、一四頁。

(7) 李徳銖・薛紀如「中国箬竹属植物志資料」(雲南植物研究)一〇卷一期、一九八八年)。

(8) 朱石麟等主編『中国竹類植物図志』(中国林業出版社、一九九四年)一六六頁。

(9) 林鴻榮「耶竹証故」(『中国農史』一九八六年第二期)。

(10) 藍勇「南方絲綢之路」(重慶大学出版社、一九九二年)三八頁。

(11) 桑秀雲「耶都・苻都・冉駹等夷的族属及遷徙情形」(『中央研究院歴史語言研究所集刊』第五二本第三分、一九八一年)。

(12) 桑秀雲前掲論文。

(13) 桑秀雲前掲論文。

(14) 工藤元男「禹の伝承をめぐる中華世界と周縁」(『中華の形成と東方世界』所収、岩波講座世界歴史、第三卷、一九九八年)一一〇、一一二頁。

(15) 藍勇「南方絲綢之路」(重慶大学出版社、一九九二年)七頁。

(16) 尤中「雲南民族史(上)」(雲南大学西南辺疆歴史所、一九八五年)、徳宏州志編委辦公室「徳宏史志資料」第三集)等を代表とする。ここで言う木棉とは棉花のことではなく、樹棉(和名きわた)である。

(17) 張楠「通往身毒的古道」(『文物天地』一九八三年第六期)、陳炎「中国同緬甸歴史上的文化交流」(『文献』一九八六年第三期)、四川省文史館『成都城坊古迹考』(四川人民出版社、一九八七年)等を代表とする。

(18) 任乃強「蜀布之路」(『文史雜誌』一九八七年第一・二期)、同氏前掲『蜀布・耶竹杖入大夏考』、藍勇前掲書「南方絲綢之路」等を代表とする。

(19) 饒宗頤「蜀布与 Cinapatta」論早期中・印・緬之交通」(『中央研究院歴史語言研究所集刊』第四五本第四分、一九七四年)、後「饒宗頤史學論著選」(上海古籍出版社、一九九三年)に再録。

(20) テキストは張震澤校注『揚雄集校注』(中国古典文学叢書、上海古籍出版、

一九九三年)による。

- (21) 小泉袈裟勝編著「図解単位の歴史辞典」(新装版、柏書房、一九九二年)一六六頁。
- (22) 任乃強前掲「蜀布・耶竹杖入大夏考」。
- (23) 任乃強前掲書「華陽国志校注」一六〇頁、注(二四)。
- (24) 任乃強前掲書「華陽国志校注」七頁、注(三)。
- (25) 劉琳校注「華陽国志校注」(巴蜀書社、一九八四年)二四三頁。
- (26) 「後漢書」卷八六、南蛮西南夷列伝の哀牢夷の条には「蘭干細布、織成文章如綾錦」とある。
- (27) 藍勇前掲書三七頁。
- (28) 護雅夫編「漢とローマ」(東西文明の交流1、平凡社、一九七〇年)三八〇～三八二頁。
- (29) 中野定雄他訳「プリニウスの博物誌」第I巻(雄山閣、一九九二年第四版)四九二頁。
- (30) 饒宗頤前掲論文。
- (31) 江玉祥「古代中国西南絲綢之路」(同氏主編「古代西南絲綢之路研究」第二輯、四川大學出版社、一九九五年)。
- (32) Dewing, H. B. *PROCOPIUS, HISTORY OF THE WARS, VIII*, HARVARD UNIVERSITY PRESS, LONDON, 1962, pp. 227-31.
- (33) 護雅夫編前掲書「漢とローマ」三八七～三八九頁。
- (34) *FRAGMENTA HISTORICORUM GREGORUM*, ed. Carolus Müllerus, vol. IV, Paris 1968, p. 270. 上の文献と当該部分の訳については、小田謙爾氏の協力を得た。厚く感謝する次第である。
- (35) 護雅夫編前掲書「漢とローマ」三八八～三八九頁。
- (36) 劉琳校注前掲書「華陽国志校注」243頁。
- (37) 任乃強前掲書「華陽国志校注」一六〇頁、注(二四)。
- (38) 「張騫が大夏で見た蜀布と耶竹杖について」(平成4・5年度科学研究費補助金/総合研究(A) 研究成果報告書「アジアにおける国際交流と地域